

# 世代を超えて 伝えていきたい 桜があります

「さまざまのこと思ひ出す 桜かな」——この芭蕉の句にもあるように、私たちに、桜とともに思ひ出す風景や、懐かしい場所があります。桜並木、校庭の桜、そして神社やお寺などに古くから伝わる大きな一本桜など。しかし、それらの中には、寿命などにより、失われていくものもあります。心に残る桜の木々を守ることは、思ひ出を守ることに、そして日本の文化を守ること。未来に伝えていきたい桜がある。そんな思いから、日本製紙グループは、さまざまな人々と一緒に、世代を超えて桜を残す取り組みを続けています。

# 紙 季 折々

しき\*おりり

日本製紙グループ

環境・社会コミュニケーション誌

Vol.14



## ちょっと気になる紙の話 地井 武男さん(俳優)



### PROFILE

#### ちい・たけお

1942年千葉県生まれ。1966年に俳優座養成所へ第15期生として入所。養成所卒業後は串田和美、吉田日出子らと創立メンバーとして自由劇場で活躍。1968年に岡本喜八監督『斬る』で映画デビューし、1970年には武田敦監督『沖縄』で映画初主演。以降は悪役からよきマイホーム/パパまで、幅広い役柄を演じ分ける総合俳優としてテレビ・映画で活躍している。また、近年はバラエティ番組やCMにも多く出演し、幅広い世代から認知されている。著書に『ちい散歩』シリーズ(実業之日本社)、『ちい散歩 地井さんの絵手紙』シリーズ(新日本出版社)などがある。

桜には新しい季節が始まった喜びを感じますね。テレビや映画で活躍する地井武男さんの趣味は、画用紙で絵を描くこととウォーキング。そんな趣味と実益を兼ねたレギュラー番組における興味深い話を語っていただきました。

ぼくのレギュラーの仕事のひとつに『ちい散歩』というテレビ番組があります。内容は町中を散歩して、市井の人々の生活の様子を見せながら、その地域の素顔を紹介するというものです。それと、豊かな自然の風景、水の流れ、木の大きさ、風にそよんでいる梢や花びら、雲の流れなど、ぼくが子どもの頃に感じた自然の中にあるなと思えるような実感。そういうものを呼び起こすというのが番組の狙いなんです。ぼく流に解釈しているのは、ハイテクからちょっと外れて、いわゆるアナログというものをもう一回見つめたり、自分の思い出の中にアナログを探してみたりというようなことなんです。それで、番組の最後に、通常ならば思い出に残るような1枚の写真を撮るとというのが普通なんですけれども、1枚の絵を描かせてもらっています。

小さい頃から絵には親しんでいるんですね。ぼくがあまりいたずらをするもので、小学校4年生ぐらいの時から近くにいた絵の先生のところに通わされていたんです。その頃から、よく日常の中で絵を描いていました。それで、大人になってからも、いつも気晴らしで絵は描いていたんです。春には桜の絵を描いてみたり、夏になったら海の絵を描いてみたりという程度のものでした。そういう下地があったものだから、番組の最後は、写真よりは絵で締めたいと思ったわけです。

紙は昔から使い慣れている画用紙で、安いものなんです。よくとしては、立派な和紙なんかよりもそのほうがいいんです。

※このインタビューは、地井武男さんが、病気治療のために活動を休止する前に実施したものです。

言葉は悪いけども、子どもがいたずら描きをするような薄い黄色がかった紙なんです。根が丈夫で、クレヨンにも耐えて、水彩にも耐えて、色が伸びて、乱暴に扱ってもいい紙なんです。番組はこの春で6年目を迎えたので、桜の絵も何枚か描きました。一番印象に残っているのは、羽村市で見た180度のパノラマの桜ですね。羽村取水堰と玉川上水沿いに約500本の桜が咲いていて、模擬店が100軒ぐらいい出るかな。その桜は見事でした。ちょうど桜吹雪の頃で、舞台の大道具さんが上から投げているかのように風に乱れ散るところに遭遇して、そこに仲睦まじい老夫婦がお弁当を広げてる光景を見ていたら、「来年も、この花が見られるかな」と会話を交わしているように思えて泣きましたね。若い人にはわからないかもしれないけど、ぼくぐらいの年になると、何かあったら、もう来年はこの花を見られないかもしれないという思いがあるんです。ぼくは、女房を癌で亡くしてね。桜が好きだった人だから、傍にいて痛切に感じました。花見だって、「来年も一緒に桜を見ましょう」と生きるエネルギーになれば一番いいですよ。

1月も、もちろん新年だけど、桜から新しい季節が始まるっていうのがあって、日本人の心を揺るがす、ひとつの新しい年を迎えたという喜びが。季節もちょうどあいまってよくなり、寒い中をずっと耐えていたのが、急に広まるようなね。この先、何回桜を見られるかわかりませんが、青い空の下でピンクの桜の花が揺れる姿と、夜桜が散る姿は、しっかりとこの目に焼き付けておきたいと思います。



### CSR報告書2011が、環境コミュニケーション大賞と環境報告書賞の優秀賞をW受賞

日本製紙グループ本社が2011年10月に発行した「日本製紙グループCSR報告書2011」が、「第15回環境コミュニケーション大賞」の環境報告書部門の優秀賞と「第15回環境報告書賞・サステナビリティ報告書賞」の環境報告書賞部門の優秀賞を受賞しました。環境コミュニケーション大賞の受賞は今回が初めてであり、環境報告書賞の受賞は2009年に続き2回目となります。どちらの賞も今年15回目を迎える歴史ある賞で、CSR報告書などを評価するものとしては国内において双璧をなす賞です。日本製紙グループでは、今回の受賞を励みに、グループCSR活動の充実に向けてさらに取り組みを推進してまいります。



CSR報告書2011の表紙

「さまざまのこと思ひ出す 桜かな」。この芭蕉の句にふさわしく、様々な桜にまつわるお話を、「ちょっと気になる紙の話」のインタビューで地井武男さんには語っていただきました。短いインタビューの中でも、気さくな人柄が随所に感じられました。現在、地井さんは、病気の治療のため芸能活動を休止されていますが、本インタビューは休養以前に伺ったお話の掲載許可をいただき掲載しています。一日も早い回復をお祈り申し上げます。(笹間)

編集後記

お問い合わせ先

株式会社日本製紙グループ本社 CSR本部 CSR部 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-2-2 TEL: 03-6665-1447  
ホームページ: <http://www.np-g.com/inquire/> (お問い合わせ) <http://www.np-g.com/appliform/> (資料請求)



本誌は間伐に寄与する紙を使用しています。2012.3.26



桜を守ることは、日本の文化を伝えること

日本には、いにしえの時代から伝わる由緒ある桜が各地にあります。奈良県の笛吹神社(コラム1参照)に伝わるウワミズザクラ(古名 波々迦木)もそのひとつです。平安時代の書「奥儀抄」には「笛吹のははかの木を切りて都に奉りぬれば神司亀のトする事(占いごと)にぞ侍りけるとかや」と記されており、境内の波々迦木が献上され、神事に用いられていたことがうかがえます。

コラム1 葛木坐火雷神社(通称 笛吹神社)とウワミズザクラ



葛木坐火雷神社

奈良県葛城市笛吹にある葛木坐火雷神社は、神代とも神武天皇の御代に創建されたとも伝えられる歴史ある神社です。火の神様と音楽の神様を祀っており、笛吹神社の名で親しまれています。



代々継承されてきたウワミズザクラ。老木のため、開花もひと枝のみ(2004年当時)

天皇が即位された年に執り行われる大嘗祭にお供えする米を作る斎田は、占いにより決められます。そしてその占いに使用するウワミズザクラは、笛吹神社から奉るのがしきたりでした。その占いでは、鹿や亀の甲をウワミズザクラで焼き、できた割れ目で斎田が決められました。



ウワミズザクラの後継木

笛吹神社の84代目の宮司さんより、日本製紙が直々に依頼を受けたのは、2004年のことでした。当時、同神社には、1本の波々迦木が受け継がれていましたが、枯れた枝も目立ち、後継の苗木作りが必要とされていたのです。日本製紙は、独自のバイオ技術を応用して、この貴重な波々迦木の後継木となる苗木を育て、2005年に笛吹神社に里帰りさせることに成功しました。現在神社には3本の後継木が育っており、笛吹神社が守り続けてきた文化は、こうして後世に受け継がれようとしています。

名木を残す「容器内挿し木技術」

貴重な名木を残すために用いられたのが、独自のバイオ技術「容器内挿し木技術」(コラム2参照)です。この技術は、もともと紙の原料となるユーカリの苗を効率的に生産する技術を応用して開発されました。光合成能力を高める環境を作り出すことで、桜のように通常の挿し木では発根が難しいとされている植物でも、直接発根させることが可能になります。挿し木で作られた苗には、接ぎ木苗のようにウイルスや菌の進入路となる継ぎ目がなく、病気になるりにくいなどの優れた点があります。日本製紙グループはこの技術を、桜の名木だけでなく、絶滅に瀕している小笠原諸島や琉球列島の植物の保護に取り組みできました。

コラム2 容器内挿し木技術

「容器内挿し木技術」は、特殊な培養室と培養容器を用いて、光の波長や二酸化炭素濃度をコントロールし、挿し付けた植物の光合成を活性化します。光合成が盛んになった植物は、成長に必要な水分や養分を吸い上げるために根を出そうとします。これにより、通常の挿し木では発根が難しかった植物でも、根が出る可能性が高まります。

容器内挿し木技術による苗作りの流れ



1 挿し付け  
枝を節ごとに切り分け、容器に入った発根床に挿します。



2 培養  
光と二酸化炭素を制御した特殊な培養室で、発根を促します。



3 発根  
約14日で発根します。発根した苗は土に植えて育てます。



4 開花  
育った苗を各地で植栽。開花へ。

国立遺伝学研究所の貴重な桜



兼六園菊桜



右近



思川



来迎寺菊桜



八重大島



八重紅枝垂



市原虎の尾



紅瑞雲

さらに日本製紙グループでは、2006年から静岡県三島市にある国立遺伝学研究所(※)に残された貴重な桜の種の保存に取り組んでいます。

国立遺伝学研究所とともに、桜の種の保全に取り組む。

同研究所には、ソメイヨシノの起源を研究したことで知られる故・竹中要博士が全国から収集した桜260品種以上が残されており、日本の桜の貴重な遺伝資源となっています。しかし、これらの桜の中には、植えられてから50年以上経ち、衰弱が始まっているものもあります。そこで日本の植物学の発展の一歩を担ってきた同研究所の桜を後世に伝えていくために、「容器内挿し木技術」を用いて後継木の育成に取り組みました。2011年までに78種類の桜の後継木を作り出すことに成功し、その苗を返還いたしました。

※大学共同利用機関法人・情報・システム研究機構・国立遺伝学研究所

地域に受け継がれる桜

現在、育成した後継木は、国立遺伝学研究所を通じて、静岡県が推進する「桜で彩る富士の景観づくり構想」の「日本の桜の郷づくり」に提供され、同研究所の近隣にある学校や寺社、公園等に植栽されています。竹中博士が日本各地から集めた貴重な桜の遺伝子が、富士山を彩る桜として、地域に、そして未来に受け継がれていきます。

日本製紙グループは、今後も自社の技術を活用しながら、桜をはじめ、文化的・遺伝学的に貴重な植物の保護に貢献していきます。



研究所近隣の小学校で行われた卒業記念植樹

日本製紙グループの桜の保全活動



**笛吹神社の桜**  
境内のウワミズザクラは、古くから神事に用いられてきました(本文参照)。



**国立遺伝学研究所の桜**  
同研究所には260品種以上の貴重な桜が全国から集められています(本文参照)。4月上旬の年1回の公開日には、多くの方がこの桜を見に訪れます。



※親木写真提供：(財)上田流和風堂(広島県)

**吉川広家が上田宗箇に贈った「桜」**  
周防岩国藩の初代藩主吉川広家が武将・茶人としても名高い上田宗箇に贈った桜(左写真)。2005年に、二人の武将の親交380年を記念して、その桜の後継木が上田家から吉川家(山口県)に贈られました。

**鹽竈神社の桜**

江戸時代には井原西鶴の浮世草子や近松門左衛門の戯曲にも登場する鹽竈桜。国の天然記念物にも指定されています。



**蜂須賀桜**

樹齢250年を超えるこの桜は、江戸時代まで徳島城内にあった桜を、徳島藩最後の藩主・蜂須賀茂韶が重臣の原田家に託したとされています。

